

コロナとの戦いが始まってこの方、先進国の中で唯一、この国のリーダーは「戦争」という言葉を選んできた。

検疫と感染管理、隔離と治療のフローチャートにおいて、指揮統括、訓練と共有、ルーティーンの徹底など軍隊的統括は不可欠である。しかしながら、日本では最高法規で軍隊の存在を否定し、戦争の反省と称して、国家権力が私権制限する責任まで放棄している。

それに代わって全体主義の匂いがプンプンする自粛世論が資本主義を崩壊させる勢いだ。

ん？戦前と変わっていないじゃないか？

かつての日本は軍国でも独裁でもない、帝国主義時代の標準国家だ。敗戦のせいで悪党呼ばわりされるが、国民あつての国家であり、怪しい世論が戦争を支えていた。

戦争を反省する上で大事なものは、「戦わない！」という選択肢ではない。

戦後の大きな誤解は、戦闘だけが戦争であり、悲惨さだけを語り継いできた点だ。

戦争は国益を守るため、外交の一手段として存在するのであり、信長の時代から、戦って打ち負かすことだけが戦争ではない。可能な限り戦闘回避して利益を守ることが大前提だ。

敵の意図を見極め、戦意を奪い、有利な講和へと導くことこそ、戦争の本意だからだ。

あくまで出口戦略、講和あつての戦闘であり、途中で引き返す勇気も必要だ。

戦争の仕方

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

さて、コロナ戦争における講和を考える時、どうやら日本には、欧米にはない未知の抑止力が存在するようだ。ワクチンや治療薬にも勝る抑止力かもしれない。

一方、ワクチンや薬のあるインフルエンザは、今も国内で30000人（関連死1万人）以上の命を奪う強敵であるが、何故か無条件降伏している。ならば、数年後、同じく季節性感冒となるに違いないCOVID-19との講和も単純明快だろう。

悔しいが、ウイルスの一定の繁栄を認められない。広く受け入れ共存できる頃には、敵意すら失っているだろう。打ち負かすため経済を止めれば、より多くの命が失われる。

犠牲者を抑える努力は必要だが、10勝1敗の小戦闘と軍隊式の感染管理を淡々と実行するだけで、経済を止める必要はよもやない。そもそも、日本では、韓国並みの戦闘態勢さえあれば、日常を喪失することすらなかった可能性もある。頼りない政権の中途半端な対策で、第1波？を乗り切った稀有な国である。

数年後、集団免疫が整えば、もはや普通の感冒であり、敵意どころか人類の関心すら失っている。全体主義よろしく、前面戦争を煽っているテレビ各局は、会社や仕事を失った人達に何と言ってお詫びするのだろうか。

わたしは、胡散臭い全体主義より、国際標準の国家権力を受け容れたい。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に「概説戦後学校教育」「武徳教育のすすめ」。



美楽での連載を束ねた百念撰集
「雲涯蒼天」
定価 700円
Amazonにて販売中